

令和6年度
小中学校の児童生徒の静岡茶の愛飲の促進に関する県民会議録

日時 令和7年3月13日（木）10:00～12:00

会場 県庁西館4階第1会議室B

目 次

I 開会

1 開会（司会・望月達彦経済産業部理事）

ア 委員の出席状況の報告（13名中12名出席）

イ 傍聴者の紹介

2 あいさつ（静岡県経済産業部 田保豪農林水産担当部長）

- ・ 県では児童生徒や保護者を対象としたお茶講座、栄養教諭の方々への研修会、県内の茶産地を紹介するデジタル教材の製作、Cha-1グランプリの開催等の取組を続けている。
- ・ 現在、県とJAグループ、静岡第一テレビの3社で静岡茶のファン拡大や魅力発信に向けた連携協定を締結し、若手職員で構成するプロジェクトチームにおいて、お茶の定額購入サービス「茶ブスク」や、サウナとお茶を組み合わせた「静岡茶ウナ」、ガチャガチャでお茶を楽しむことができる「お茶ガチャ」に取り組んでいる。また、お茶の機能性をテーマとしたショートアニメ、お茶の品種をイメージしたキャラクターを制作し、11月に開催されました全国お茶まつりで披露したほか、各種SNSで発信した。
- ・ これらの取り組みが、児童生徒の静岡茶の産地、歴史、文化などに理解を深め、静岡茶に楽しく触れながら、郷土への愛着を深め豊かな人間形成につながることを期待している。
- ・ 本年、4月19日にふじのくに茶の都ミュージアムでの開幕式を皮切りに、世界お茶まつり2025の春の祭典が開幕し、5月21日までの33日間、静岡県内はじめ、首都圏や関西圏でも広く実施することとしている。期間中は、新茶を使ったスイーツや料理を堪能できる他、お茶畑でのサイクリングやウォーキング、周遊する体験、茶摘み体験、手揉み茶作り体験など様々なプログラムを実施するので、ぜひとも足を運んでいただきたい。

3 会長の選任とあいさつ

ア 都市教育長協議会会長の奥村篤委員を選任する

イ 奥村会長のあいさつ

- ・小中学校において、静岡茶を飲む機会を通じて食育を推進することにより、子供たちの静岡茶の愛飲の促進を図ることを目的に開催しており、8年目になる。
- ・子供たちに静岡茶の魅力を知ってもらう、親しんでもらうために、教育に携わる私自身が改めて静岡茶の魅力を理解するため、4月の静岡県都市教育長協議会の総会に出席された都市の教育長へ沼津産のお茶を提供している。
- ・昨年の夏には、静岡県内の35市町の教育長が集まる研修会が菊川市で開催され、菊川市教育委員会から深蒸し菊川茶の冷茶のおもてなしがあり、県内の教育長を初め会場にいた全ての人から大好評であった。静岡茶が一年中楽しめるということを再認識したと思う。
- ・沼津市の教育長としては、市内公立小中学校と幼稚園において、新茶の沼津産のお茶を使った茶飯を学校給食で提供した。また、日本茶インストラクターの沼津支部の支援により、毎年希望する学校に対してお茶に関する講座を開催している。
- ・1959年の統計開始以降、60年以上荒茶の生産量が国内で1位だった静岡県が、鹿児島県に抜かれて2位になった。生産量が低下した理由としては、お茶の価格の低迷や後継者の不足などが挙げられている。こうした中、静岡県のお茶の発展に繋がる素晴らしい取り組みも行われており、それが官民一体となって取り組む静岡茶魅力発信プロジェクトである。四つの企画のうち、特にガチャガチャをテーマにしたお茶ガチャは、本日の会議のターゲットでもある子供たちに、非常に親しみやすい企画と考えている。

II 議事

1 事務局の説明（資料1 小中学校における静岡茶の食育と愛飲の促進について）

(1) 報告

ア 静岡茶の愛飲の取組状況（佐田康稔お茶振興課長）

- ① 通年での静岡茶の愛飲の取組状況（2頁）
- ② お茶に関する食育の機会の確保（3頁）

イ 令和6年度の取組報告

（ア）教育委員会健康体育課からの報告（夏目伸二健康体育課長）

- ① 児童生徒及び保護者向けの静岡茶講座の実施（4頁）
- ② 栄養教諭等食育担当者研修会の実施（5頁）

- ③ 静岡茶に関する食育の実践
 - i 静岡茶食育カリキュラム事例集（6 頁）
 - ii 学校で静岡茶の食育を行う際に参考となる情報をチラシに集約し、配布（7 頁）
- ④ SNS（インスタグラム）を活用した情報発信（8 頁）
- ⑤ 茶器の提供（9 頁）
- ⑥ 学校における静岡茶の食育の取組
 - i 学校における静岡茶の食育の取組（裾野市立東中学校）（10, 11 頁）
 - ii お茶を使用した給食の取組（12 頁）
- （イ）教育委員会義務教育課からの報告（池上潤子義務教育課指導監）
 - ① 山梨県とのお茶の学習交流（13 頁）
- （ウ）ふじのくに茶の都ミュージアムからの報告（野中康司副館長兼学芸課長）
 - ① ミュージアムにおける活動
 - i 小中学校の施設見学の受入、教員のための博物館の日（14 頁）
 - ii 学校への茶ミューキットの貸し出し、静岡茶を学ぶ子ども向け動画教材の集約（15 頁）
- （エ）お茶振興課からの報告（佐田康稔お茶振興課長）
 - ① 小中学生向け茶競技会「Cha-1 グランプリ」の開催（16～18 頁）
 - ② ふじのくにジュニアお茶マイスターについて（19, 20 頁）
 - ③ ふじのくにジュニアお茶マイスターの活躍の場を設ける呈茶イベントを実施（21 項）
 - ④ その他の取組
 - i お茶の機能性短編動画（3 本）の積極的な活用・配信（22 項）
 - ii 静岡ミルクティープロジェクト（23 項）
- （2）課題に対する今後の取組（佐田康稔お茶振興課長）（24 項）
 - ア 課題
 - （ア）通年での静岡茶の愛飲を促進
 - （イ）教員や保護者の愛飲への理解促進
 - イ 今後の取り組み（事務局案）
 - （ア）「マイボトル持参運動」の定着・拡大
 - （イ）静岡茶の魅力をわかりやすく配信
 - （ウ）ふじのくにジュニアお茶マイスターの活躍
 - （エ）茶産地でない地区と茶産地による交流支援
 - （オ）ふじのくに茶の都ミュージアムの利用促進
 - （カ）静岡茶の食育の支援体制づくり

2 委員の感想や意見

(1) 松島 章恵委員（日本茶インストラクター）

- ア 静岡ミルクティープロジェクトは、お茶に親しむ敷居が低くなり、またカルシウムなども摂取できるため、取り組みとしてだけではなく栄養学的にも良いと思った。また、ミルクティーゼリーにするなど、応用も広がると感じた。
- イ 資料の5ページにもある栄養教諭、食育担当者向けのお茶講座の講師として昨年も講座した中で、急須の持ち方が怪しかったり、お茶の旨味が温度によって違うという反応をする先生もいたため、年1回の取り組みであっても毎年することが有効と考える。
- ウ 小中学校ではないが、県立大学の茶学入門講座を担当しており、お茶の種類と美味しい入れ方、比較試飲をしている。今年度、100グラム300円のお茶と1000円の一番茶を配り、アンケートを行った。その結果、300円のお茶が好きと答えが43%であり、意外と多く驚いた。理由は、いつも飲んでいるペットボトル味に近いから美味しかったや知っているお茶の味がしたということだった。そのため、まずは本当に美味しいお茶を理解してもらう取り組みが必要である。
- エ あまり急須が普及していない状況ではあるが、左利きの子が多くなってきているため、考慮する必要があると感じた。
- オ お茶は世界で飲まれているため、食育を通して、コミュニケーション手段の一つになると考えている。静岡茶は産地、種類が多く、歴史もあるため、歴史や健康効果など、コミュニケーションツールの一つになるのではないかな。また、インバウンドで海外の方と接する機会も多く、お茶のツーリズムも流行ってきている。そのため、英語で簡単なお茶の説明など、英語とお茶の分野を掛け合わせて、現場に取り入れると成果が見えやすいと感じた。

カ 奥村会長のコメント

- ・ミルクティープロジェクトに新しい可能性感じたということは、非常に嬉しいと思った。
- ・食育の観点とコミュニケーションツールのお話で、毎年定期的に積み重ねていくことによって、より定着をしていくことになる。また、関心を持ってもらう人たちからだんだんと沼にはまっていく、本質に迫っていくような方向にもっていきたい。

(2) 片岡 佳美委員（清水特別支援学校校長）

- ア 2011年から茶畑を借りてPTAと職員が通年で管理しており、7月に肥料を撒き、10月ごろに生徒がお茶を摘んでいる。このお茶を地域の店舗で加工し、12月に出来上がったお茶のパッケージとネーミングを募集した。出来上がったもの

を給食で飲んで、家庭に持ち帰ったお茶を説明しながら一緒に飲むという、1年間を通じてお茶に関わる取り組みを行っている。

イ 生産者から、「学校の中に、お茶畑があるのもっといいね」ということでお茶の木を植えたが、なかなか育たない状況である。

ウ 先ほど松島委員からコミュニケーションのツールとしてのお茶という話があったが、今回提供したお茶をぜひコミュニケーションツールとして、御自宅で飲んでほしい。

エ 奥村会長のコメント

- ・ 2011年から14年ほど継続され、地域の農家の方々の絶大なる支援があるという、まさに地域総当たりでの取り組みである。ネーミングあるいはパッケージ、こういうものが子供たちの活動に繋がっているということで非常に良い取り組みだと思う。
- ・ 11年から14年も続けることによって、今のお茶が出来ているということをお子たちも感じていると思う。

(3) 粉川 克彦委員（常葉大学教育学部附属橘小学校校長）

ア 去年はお茶の入れ方教室を紹介したが、今年は長年の伝統があるお茶クラブにお茶の先生を年何回か招いている。その子供たちにいろいろ話を聞いたところ、五感を使ってお茶の色、匂い、苦みなどのいろんな言葉が感想としてたくさん出てきたため、先ほどの松島委員のコミュニケーションツールとしてのお茶ということに共感した。

イ お茶を習うことにより、校内のバザーでお点前をする経験ができたり、海外交流先の児童生徒にそれを披露したり、関心を持ったことで系列の中高の茶道部などに出かけたなど、お茶を通していろいろな繋がりが広がると感じた。

ウ 奥村会長のコメント

校長室での話からバザー、あるいは海外交流、あるいは中高の茶道部、そういったところにどんどん広がっていくということ。お茶を通じた人との繋がり、支援の広がり、そういう子供の健やかな成長に非常にお茶が生かされてると思った。それから日本人としてのおもてなしも伝わってきた。

(4) 沖 孝子委員（掛川市立原田小学校校長）

ア 先ほど提案があった取り組みの中で、動画等をホームページに掲載することや他県とのお茶の学習交流をする、魅力を発信する活動などは、大変有効であると思った。

- イ 本校でも3年生を中心に、今年は3、4年生で総合的な学習で繰り返し、お茶に関する活動を行っている。そこには、やはり感動が伴わないといけないと感じており、本年度は地域家庭を巻き込むという活動と自分たちが繰り返し飲んで、そして接待し、ありがとうと言われる経験を行った。
- ウ こうした活動が5、6年生のSDGsの活動にも繋がっていくため、繋がりが本当に大事であると実感している。

エ 奥村会長のコメント

- ・動画、ホームページでの発信、アウトプットは、お茶づくりが盛んではない地域にとっては非常にありがたい活動である。
- ・ジュニアお茶マイスターで、浜松で上川元法務大臣である中央会長、あるいは鈴木康友知事に呈茶をした小学生は、沼津市立第四小学校の5年生の山田くんである。全国お茶まつりのイベントの浜松磐田信用金庫で来客者に呈茶したマイスターも沼津市立第二小学校の4年生の芹沢さんである。沼津の子たちも、「おいしく飲んでもらえたよ」と校長先生に話されたということで、そういう子供たちがどんどん広がっていくことがすごく大事である。

(5) 見崎 由美子委員（静岡県学校給食栄養士会会長）

- ア コミュニケーションツールとしてのお茶に関して、去年勤務していた牧原中学校では校内に学校茶園があり、その茶畑で茶摘みをし、製茶して販売をする取組をしている。そうした中で、自分たちの摘んだお茶の味を知って誇らしくPRできるよう、お茶会を行った。
- イ さらに、地元のお菓子屋さんに協力してもらい、自分たちでお茶菓子を作り、その味をお茶会で実際に売り込むという流れの活動に取り組んだ。お茶菓子が簡単に作れることやお茶の味わい方を知ることができ、コミュニケーションツールの活動にもなった。
- ウ 修学旅行先の京都・奈良県で、作った1煎茶を配布する取組も行った。お茶の飲み方の資料がわかるQRコードや感想を送れるリンクもつけたところ、一件外国人から返答があった。自分たちの行った取組が周りにつながっていくことや、地元のお茶を誇らしくPRでき、コミュニケーションがとれたこと、そしてそれが継続していくのは良いことだと思った。
- エ 今勤務している牧之原市立相良小学校では、学年に応じてお茶のPRやお茶の良さを発見するという取組を実践している。
- オ 【奥村会長の質問】栄養教諭として、どのような取組に関わってきたか。

カ 【見崎委員回答】子供たちに、お茶の準備の仕方やおいしい入れ方を教えるハードルを下げるができていると思う。また、給食でお茶を取り入れることで、子供たちにより身近にお茶を感じてもらえるように頑張っている。

キ 奥村会長のコメント

- ・栄養教諭の働きかけは鍵になると思う。本市では今年、各教育委員会に栄養教諭を指導主事として1名配属させていただいた。この1年で、学校現場の意見と行政の意見が相互性を持ち、取組の効果が上がっていると感じている。
- ・給食についても、お茶を使ったお菓子や食事を子供たちと共に考えながら献立に入れているところが、今年は大きな現れだと思った。
- ・ある中学校の家庭科部では、ふじのくに茶の都ミュージアムからのお茶の貸出し教材を使用し、お茶に親しむ機会を設けたという。沼津市としても、関心を持って愛飲の取り組みが広がりつつあると思う。

(6) 後藤 和寿子委員（料理研究家（和食文化国民会議副会長））

ア 他の県と違い、多方面から積極的に子供たちへのアプローチをしていることをうれしく思う。

イ 私は和食給食を続けていくことに力を入れているが、そこで問題になるのが給食の時に牛乳が出ること。水やお茶を水筒で持参し、給食時にはそれらで和食給食を食べ、後で牛乳を飲むよう先生から指導すると一番効果があると思う。小中学校のときに毎日の給食を通して、和食にはお茶が合うことを知り、自然とお茶を日々飲みたいと思うようになる。お茶にはほっとするような精神的効果も、体にも良い効果もある。家庭ではお茶も和食もなかなかできないので、牛乳と給食、それを学校関係者にお願いしたい。

ウ 奥村会長のコメント

- ・味覚は小中学生のうちに育てていくものなので、日々の給食の中でも和食とお茶を、という意識が大切だとお話しいただいた。
- ・沼津市の浮島小中学校では、地域の方々から給茶機をいただいて、毎日それでお茶を飲んでいる。地域でも盛り上げようと取り組んでいることに感謝している。
- ・ペットボトルのお茶に関して意見感想はあるか。

(7) 溝口 玲子委員（静岡県PTA連絡協議会副会長）

ア 水筒の方が味の変化もなく、夏場は冷たいまま飲めるが、ペットボトルを持っていく児童もいるかもしれない。ただ学校には捨て場がない。

- イ お茶を買うのは保護者であるため、保護者にお茶を飲む習慣がなければ子供にも浸透しない。メディアからのお茶に関する楽しそうな情報を得て、親子で出かけたときにお茶に親しむのが効果的ではないか。
- ウ 学校では、授業で取り組んだり、地域の方とお茶を通じて茶道を習うことが出来れば、子供たちはお茶に親しめると思う。
- エ 食育に関しては、和食と牛乳は合わないだろうが、栄養価の観点からは、牛乳を飲むのが大切である。そこで、ミルメークの抹茶版であれば、子供がお茶に親しめる。栄養の意味では、お茶と牛乳のミックスは悪くないと思う。
- オ 保護者へのお茶の浸透については、情報メディアは効果的。イベントでお茶を取り入れるのも良い。私達の発信も必要である。

カ 奥村会長のコメント

- ・親がお茶を飲む習慣がないと子供への浸透率がないことはその通りである。
- ・学校の参観日に子供が親にお茶を入れるのはどうか。
- ・今静岡抹茶が若年層ではやっている。静岡茶のチャンスが広がるだろう。

(8) 杉山 和陽委員（静岡県農業協同組合中央会常務理事）

- ア 定着した取組も新しい取組みもあり生産者としてはありがたい。
- イ お茶のテキストや教材を一元化するとさらにお茶は広がるのではないか。
- ウ JA としてのお茶の食の教育活動の取組としては 42 件あり、田植や茶摘み、茶工場見学をしている。この食育をより強化し、厳しい農家の現状である高齢化や売値の問題を解決したい。そのために、まずは子供やその親にそれらの問題や取組みを知ってもらうのが欠かせない。
- エ 若年層に向けては茶ブスクや茶ウナ、お茶のガチャガチャといった取組みを通じてお茶の振興をしている。

オ 奥村会長のコメント

- ・まず取組窓口を焦点化し、情報を集約する工夫は必要。
- ・次世代を担う子供たちがお茶に関わる仕事を知り、興味をもつようになるのが行政としても大事。

(9) 山下 昌徳委員（静岡県経済農業協同組合連合会常務理事）

- ア お茶のニーズが減っている現状では、お茶を生活の中にすり込んでいくことで習慣化し、消費拡大しなければならない。そのために、茶ブスクやいろいろな PR 活動、食育などにより、お茶の魅力を発信しなければならない。

イ 昨年は子供たちにつゆひかりブレンドというものを応募いただき、CMに出ていただいた。将来お茶の消費者となっていていただくとともに、生産者になってもらえるよう努力したい。

ウ 大相撲5月場所の期間中、両国駅や国技館でお茶の装飾やPR活動を行う。そういった取組みを通年やらなければならない。

エ 奥村会長のコメント

- ・生活にすり込むというのがキーワード。
- ・子供たちがお茶にかかわる体験を引き続きやっていくことが大切。

(10) 長瀬 隆委員（静岡県茶商工業協同組合理事長）

ア 静岡県の茶生産が全国2位になったのは我々茶商の責任だが、静岡県の茶業は製茶維持率や焙煎技術が高いため持続の可能性がある。

イ お茶の愛飲に皆さんが協力してくれているのはありがたい。このことを県内の茶商に情報共有していきたい。

ウ お茶のとれない宮城県ではお茶博士、静岡県で言う「T-1 グランプリ」を静岡県の協力もあり、普段お茶を飲まない子供たちにもお茶を飲む機会をつくることができた。そういった地道な活動を続けていき、全国に広がると良い。茶商として応援、協力する。

エ 奥村会長のコメント

- ・今の小中学生に、静岡県民として静岡茶を愛する心をしっかりと育てていきたい。

(11) 久保田 浩子委員（函南町教育長）総括

ア 取組を継続していくことや、つながりを大事にし、ひとつひとつ業種や活動をブラッシュアップしていくことが非常に重要である。

イ 小中学生の頃に本物のお茶の味をどうすり込んでいくかがポイント。

ウ スイーツとお茶の組合せ、牛乳とお茶の組合せ、人と人がコミュニケーションをとるためのツールとしてのお茶という価値観。今後の活動の広め方やブラッシュアップの仕方が今日新たに提案された。

エ 函南町の小学校ではお茶摘み体験やおいしいお茶の入れ方をJAの方に教わり、地域のお年寄りと交流をしてお茶を通しておもてなしをした。学校の単体の行事ではなく、行事によるつながりや、人と人をつなげていくことの大切さを感じた会だった。

オ 各委員からいただいた意見、提案を踏まえ、引き続き義務教育段階の子供たちが静岡茶について学ぶ機会の確保を進めていきたいと思う。そのためにも、経済産業部、そして県の教育委員会が連携して、来年度の事業を進めていく。

(12) 意見終了

次年度の会議は令和8年3月ごろに開催する。

Ⅲ 閉会

1 あいさつ（池上重弘静岡県教育委員会教育長）

- (1) 非常に有意義な密度の濃い議論ができた。
- (2) 静岡茶を愛飲する機会と食育機会の確保に取り組んでいる県内の小中学校は、愛飲条例が制定された平成28年に比べて着実に増えている一方で、課題も残っている。
- (3) 私の体験談からも、やはり小中学校の頃の味覚は大事である。
- (4) 小中学校のときにお茶にかかわる体験をして、お茶の本当のおいしさや、世代や国籍を超えて、お茶がコミュニケーションツールになることを子供のときにしっかり学び、経験となっていくような取組みを、改めて留意しながら進めていきたい。
- (5) いただいた意見や提案を踏まえて、引き続き義務教育段階の子供たちが静岡茶について学ぶ機会の確保をしっかり進めていきたい。

2 閉会